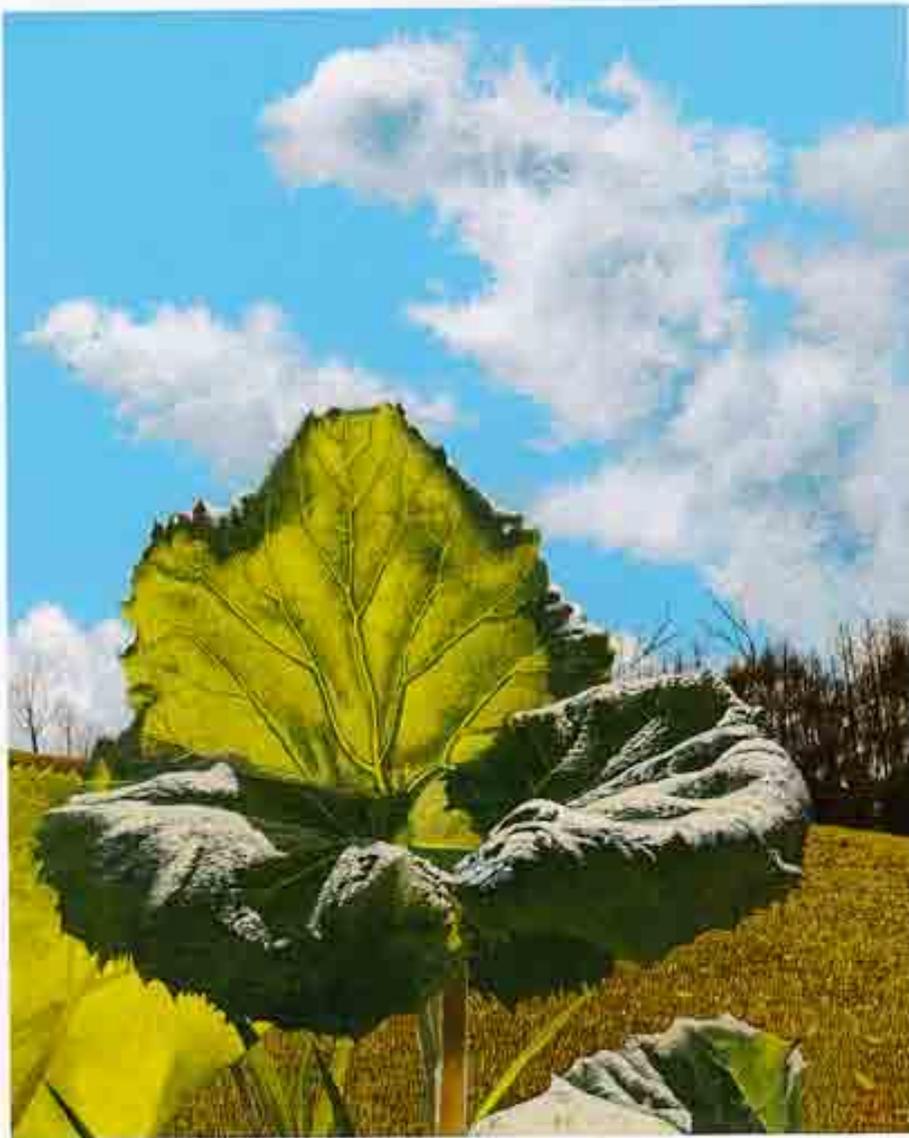


木酔馬

5 月



螢来て灯れば手捕る旅ごろも

秋櫻子

『蘆雁』

「麦秋旅吟」十三句中の作。浦上の句碑除幕式出席のための最後の長崎行。服に止まった螢を手に囲う。指の間を洩れる光は誰の魂だろうか。初出の排列を変え掉尾にこの句を置くことよって次稿の、軽井沢での「遷子君追憶」への続きが明確になった。——「窓あけて落葉松の螢見ればなし」。窓外の螢に眼を留めた時、島原でのあの螢は遷子の魂だったのだと思いつたに違いない。

小野恵美子

その声

徳田千鶴子



山笑ふ水音高き字ひとつ

摘みつみてなほ嵩のなきつくづくし

うぐひすに目覚めし朝を幸とせむ

木戸押して沈丁の香に包まれぬ

余寒なほ告ぐべき言葉のみこみて

亡き夫の我を呼ぶ声春の闇

我が影に桜降りつぐふと寂し

五月集



淡

石本百合子

佐保姫の筆遊びして雲淡し
つばめ来る油長者の鬼瓦
遮断機の向うに消えし石鹼玉
ひと言に離れし心鳥雲に
絹の道来し鏡とや春惜む

蜷の道

土屋

啓

如月の望の日いまだ迎へ来ず
僧老の介護や二人しづか咲く
晩学の行手はるかや蜷の道
頬白や一筆せむに父母は亡く
なにもかも捨つるに似たり花吹雪

紙

市村健夫

寒明の水に触れたる紙の反り
恋猫の隠れてゐたる中宮寺
からかさ紙の音立て春の雨
兄弟の喧嘩は遊び水温む
春光や画布に描き足す空の色

花辛夷

栗山よし子

一村に減りし土蔵や花辛夷
冴ゆる夜の抽斗に鳴る貝三つ
降る雪や上海にゐる同期生
廻廊に雪の吹き込む出羽詣
花種の袋の角の鋭くて

風

船

大谷昌子

一湾の風が仕上げる干鰯
包帯に夕日の滲む接木かな
陽炎の中より嵐山電車来る
天井に風船残し園無人
霾や東西南北四面楚歌

針まつり

稲葉三恵子

神苑の鶏の高鳴く針まつり
諸鳥の声の明るき光悦忌
朝ざくら弾け始めし耀の声
岳麓の風荒あらと花辛夷
水底に日の斑ただよふ蝌蚪の群

コロナウイルスを、私は少し軽く考えていたかもしれませんが。こんなに蔓延するとは思っていませんでした。

誰がなっても不思議でない状況に、句会は全て通信句会となりました。それでしみじみ感じました。

俳句は座の文芸だと。言葉で話すのと字で書くのとは、伝わる力が違いますし、皆で意見を述べたり、自分は是を詠みたかったと話す事で、句の解釈や拡がりが生まれると思うのです。句会は大切ですね。

でも外出も儘ならない時だからこそ、出来る事もあると思います。高齢者ほど危険と言われ、ついつい引っ込み思案になりそうな日々ですが、コロナに負けずに過しましよう。せつかく、桜も咲いて春が来たんですもの。

乾鮭の吊られ鋼の打つごとし 石川 幸子

〈鋼〉という表現が、乾鮭の姿をまさまじと表わしています。東京では殆ど見かけない事はないのですが、北国では伝統の光景でしょう。風に揺れる乾鮭の厳しい顔が見えてきます。秋櫻子の一句〈乾鮭を切りては粕につつまけり〉。

工房の藍のひと色 冴返る 杉田智榮子

杉田さんのお住まい徳島県は藍の産地。阿波藍は青より濃くて紺より淡く、サツカ日本代表のジャパンブルーはこの藍色を基にしていると聞きます。染料の■は生き物なので、微妙な色の違いが生れますが、そこで生じた〈ひと色〉が、杉田さんの心に残ったのでしょうか。季語が藍と響きあっています。

鳥雲に忘れられゆく童唄 早川 俊久

齢を重ねるたびに、昔が思われるようになりますね。久しぶりに聞く童唄。口遊んでみると、意外にすっかり覚えていて、様々な思い出が甦ってきます。若い(幼い)頃に覚えたものは、消えないのですね。私は五十年近く前に卒業した学校の校歌が、歌えてびつくりした経験があります。〈鳥雲に〉のもつ抒情が〈童唄〉にふさわしいと思います。

利休忌や茶碗の銘の無一物 近藤 悦子

〈無一物〉は、一切のものから自由自在になった心境で、禅から生まれた言葉ですが、いかにも利休に相応しいですね。どんな陶磁器であろうかと想像しました。動詞のない句ですが、軽みのあるバランスのとれた句です。

竹林の奥に風棲む余寒かな 中江はるみ

京都には見事な竹林が多く、嵯峨野が殊に有名ですが、私は祇王寺の草庵の脇の小さな竹林が好きです。小鳥の声や姿がちらちら見えて、いかにも尼寺らしいやさしさを感しました。掲句は鬱蒼とした大きい竹林でしょうね。〈余寒かな〉の結びで、その竹林の深さが目に浮かびます。

島よりの受験子ひとり漁舟発つ 西川 麻規

漁舟で受験に向かう姿。親御さんだけでなく、島の人々もきつと応援しているに違いありません。都会の者には詠めないほのぼのとした海と島の景に惹かれました。

馬酔木集

徳田千鶴子 選



捨舟の崩す引波鳥雲に
乾鮭の吊られ鋼の打つごとし
実濤の尖りて地鳴る島岬
浜市のひと日の乾き寒鯉

仙 台 石川 幸子

山鳩の声竹林の朝ぬくし
利休忌や茶碗の銘の無一物
楽焼の緋色寂ぶるや光悦忌
二ヶ月は余慶のひと日土を練る

近藤 悦子

思ひ捨て切れずセーター解きつつ
工房の藍のひと色冴返る
身を離れゆく足音や夜の落葉
隣家の灯まで半里やぼたん雪

鳴 門 杉田智榮子

マーマレード煮つめ春光透きとほる
人見知りしはじめ春の月円か
雨音の追ひ掛けて来る春の闇
卒業す実験室の鍵かへし

山 口 土手 晶子

鳥雲に忘れられゆく童唄
雛飾る心に故山抱きつつ
一兵の兄の忌修すつちぐもり
廃校に残る胸像囀れる

浜 松 早川 俊久

舞ふ巫女の黒髪なびく風二月
寝釈迦にも似たる島の嶺春の霧
梅東風や滅ぶ平家の地に立ちて
花の種園児にもらふ道の駅

廿日市谷 陽石

風雪十五句 千鶴子選

もろ鳥や大涅槃図にある余白
一筆啓上春立つ穂先馴らしけり
蠟 涙の十重の飴いろ一の午
絹雲の翳りを拾ふさくら貝
積み上げて軒の高さや楮蒸す
魚は氷に上る何かを始めねば
聖堂へ渡る小橋やつばくらめ
沈丁の香り濡れぬる夜の帳
三月や有情無情の波の色
亡き夫に呼ばれ朝寝の夢覚むる
ちぎり絵の手先に残る寒さかな
花衣かけて衣桁のつくる闇
海風をさきだてて来る寒念仏
せせらぎの律を分けたる落椿
反抗期の只中の子と青き踏む

河野 亘子
小坂優美子
佐藤 保子
川内谷育代
能勢 俊子
緑川 啓子
中島 久子
齊藤いさを
夏生 一暁
辻本みえ子
徳永 亜希
成智いづみ
伊藤 ふみ
萩 庭一幹
堀田 順子